HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	Literary Fathers and Sons : Charles Dickens, Mark Twain, Sherwood Anderson, and Paul Auster [an abstract of entire text]
Author(s)	一瀬, 真平
Description	この博士論文全文の閲覧方法については、以下のサイトをご参照ください。 https://www.lib.hokudai.ac.jp/dissertations/copy-guides/
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第15581号
Issue Date	2023-06-30
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/90239
Type	doctoral thesis
File Information	Shimpei_Ichinose_summary.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文内容の要約

博士の専攻分野の名称：博士（文学）　　氏名：　一　瀬　真　平

学位論文題名
Literary Fathers and Sons: Charles Dickens, Mark Twain, Sherwood Anderson, and Paul Auster
（文学的父子：チャールズ・ディケンズ、マーク・トウェイン、シャーウッド・アンダソン、ポール・オースター）

本論は二組の英米作家間の影響関係――アメリカ作家マーク・トウェイン（Mark Twain）とイギリス作家チャールズ・ディケンズ（Charles Dickens）、及び、アメリカ作家ポール・オースター（Paul Auster）とシャーウッド・アンダソン（Sherwood Anderson）――について考察したものである。それぞれの組の後発作家（トウェイン、オースター）のテクストに『オイディプス王』（*Oedipus Rex*）が織り込まれていることに着眼し、そこから、それぞれの作品に後発作家と先行作家という文学的父子の物語が潜んでいることを論じた。オースターにとってもトウェインにとっても重要な先行者は多くいるが、オイディプス的要素が反映された父子物語に先行者（ディケンズ、アンダソン）とその作品が投影されていることを手がかりに、それぞれディケンズとアンダソンを彼らの文学的父と措定し、彼らの先行作家との関係性をテクストの中に見出した。そして、オイディプス物語において偶然という要素が重要であるのと同様に、彼らの影響関係においても偶然という要素が重要であることを考察した。トウェインとディケンズの関係に関しては、抑圧されたトウェインの記憶がディケンズのテクストに絡まりついているという偶然である。オースターとアンダソンに関しては、オースターが『ムーン・パレス」」（*Moon Palace*）という彼の最初の小説を執筆する際に、アンダソン作品を予期せぬ形でなぞったという偶然の一致である（『ニューヨーク三部作』[*The New York Trilogy*]など『ムーン・パレス』より先に出版された作品もあるが、オースター自身がこの小説を最初に書いた作品だと述べている）。本論は、この偶然の一致が、後発作家による先行作家の作品の場面のリライトに関わっていることを論じた。

本論のもう一つの目的は、その影響関係を通して作品を見ることで、先行作品を再評価することである。本論は作品間の関係性を分析することを通して、後発作家の先行作品への読解・視点を推察し、その読解・視点を利用することで、新しい観点から先行作品を読むことを試みるものである。これらを通し、先行者との偶然に引き寄せられる作家の性質を明らかにしながら、ディケンズ作品とアンダソン作品の再考を行った。

第１章

ディケンズとトウェインがそれぞれ抱えていた少年時のトラウマ的体験（父親の解剖を目撃したトウェインの経験と、父親の借金に起因するディケンズの靴墨工場での労働経験）に偶然の共通項があることに注目した。ハワード・ベーツホルド（Howard Baetzhold）などにより、トウェインとディケンズの作風や生い立ちの類似性が指摘されてきた。本論が注目した少年時のトラウマ的過去の類似は注目されてこなかったが、この観点は両作家のテクストの影響関係に新しい意義を提示することにつながる。まず本章では、トウェインが、ジョン・フォスター（John Forster）のディケンズの伝記（*The Life of Charles Dickens*）に描かれたディケンズのトラウマ的記憶に注目しえたことを検討した。さらに、そこに描かれていることはトウェインのトラウマと共鳴し、故に、ディケンズの作品や伝記がトウェインにとっては自らのトラウマ的記憶を刺激するもので

あった可能性を指摘した。この観点を応用することで間テクスト性の意義の解明を試みた。『二都物語』(*A Tale of Two Cities*) と『トム・ソーヤーの冒険』(*The Adventures of Tom Sawyer*)、『大いなる遺産』(*Great Expectation*) と『ハックルベリー・フィンの冒険』(*Adventures of Huckleberry Finn*) の各組の影響関係が論じられてきた。さらに本論は、ピップとハックルベリー・フィンの類似等を新たな観点から論じた。そして、それらのテクスト間の関係には、両作家のトラウマ的経験の偶然の一致が関わることを提唱した。トウェインは、反復脅迫の症状のように、ディケンズのトラウマ的記憶が関わる場面（自らのトラウマを彷彿とさせる場面）に繰り返し引き寄せられたのだ。その結果としてトウェインは自らの作品にディケンズ作品の該当場面を刻んだと本論は考えた。

第２章

『大いなる遺産』が『ハックルベリー・フィンの冒険』の１６章に影響を与えたことに注目した。その類似の意義を、トウェインの南北戦争の記憶と戦時中に起こったディケンズ作品が関わる偶然という観点から考察した。マーク・トウェインというペンネームは南北戦争中に生まれており、この戦争がトウェインにとって重要な意味を持つことが多くの研究者によって指摘されてきた。実際トウェインは、南北戦争初期、南部連合国寄りの義勇軍に参加したように、この戦争と関わりを持っている。その従軍と同時期、『大いなる遺産』は政治雑誌『ハーパーズ・ウィークリー』(*Harper's Weekly*) に連載されていた。本論は、その戦争渦中にいたトウェインが『大いなる遺産』を『ハーパーズ・ウィークリー』で自分の戦争経験と関わる記事と共に読んでいたという偶然の出来事が起こった可能性に着眼した。例えば、ミズーリ州セントルイスで起こったキャンプ・ジャクソン事件（トウェインは事件の直後にその都市にいた）や南北戦争初期のイリノイ州ケイロの記事（トウェインはその町を戦争初期に蒸気船で通っている）やミズーリ州の最初の戦いであるブーンビルの戦い（トウェインはその戦いと同時期、付近で従軍していた）に関する記事などである。『大いなる遺産』はトウェインの戦争記憶と絡まりあっていることが考えられ、この点が、『ハックルベリー・フィンの冒険』の１６章の執筆に部分的に影響したことを考察した。つまり、同小説で南北戦争を彷彿とさせる舞台の場面を描く時、戦時中にディケンズ作品を読んだ記憶が頭を過ったため、トウェインはその場面をリライトしたのではないかと本章は結論づけた。

第３章

１・２章の影響関係の議論を基にディケンズ作品を再考している。つまり本章は、トウェインが嘱目したと考えられる、ディケンズ作品とトラウマ的出来事や南北戦争との関連の観点を作品解釈に応用した。前半では、ディケンズの少年時のトラウマ的記憶の観点から、ディケンズの短編『チャールズ 2 世の時代の牢獄で発見された告白書』(“A Confession Found in a Prison in the Time of Charles the Second”) の再評価を試みている。まず、作品内容とその舞台となっている時代の歴史的出来事（仏蘭戦争、名誉革命）との隠された接点を見出した。この観点を活用しながら、最終的に、ロンドンの靴墨工場でのディケンズの記憶とその告白への葛藤を同短編の中に読み込んでいる。

後半では、『大いなる遺産』を、南北戦争との関わりから再考した。この作品はアメリカでは南北戦争中に政治雑誌『ハーパーズ・ウィークリー』に連載されていた。ディケンズが北部の読者を気にかけていた点等を鑑み、この作品に北部寄りで反南部連合国的な側面を読み込んだ。例えば、『大いなる遺産』の終盤の場面（ピップらがエジプトへ出向く場面や彼らがマグウィッチを助けるためにボートでテムズ川を下る場面等）に、「綿花王国」（南部）の綿花外交に抗う観点を見出した。これらを踏まえ、この作品のアメリカにおける新たな文化的意義―『ハーパーズ・ウィークリー』の戦争物語と『大いなる遺産』との共鳴―を提唱した。

第４章

本章は、オースターにとって実質上の最初の小説『ムーン・パレス』には、先行者アンダソンとの関係性が刻まれていることを論じた。オースターはエドガー・アラン・ポー (Edgar Allan Poe)、ナサニエル・ホーソーン (Nathaniel Hawthorne)、サミュエル・ベケット (Samuel Beckett) やミゲル・デ・セルバンテス (Miguel de Cervantes) など多くの作家の影響を受けていることを

直接述べており、先行研究ではそれらの作家との影響関係が論じられてきた。一方で、オースターがアンダソンから影響を受けていることは着眼されてこなかった。しかし、『ムーン・パレス』に関しては、重要な場面に「卵」（“The Egg”）「手」（“Hands”）「ブレイクフットの傑作」（“Blackfoot’s Masterpiece.”）と言ったアンダソンの諸作品との類似性が見られる。さらに、『ムーン・パレス』には、アンダソンが作品執筆の題材として重宝していたと考えられる歴史上人物（画家ラルフ・アルバート・ブレイクロック[Ralph Albert Blakelock]や科学者ニコラ・テスラ[Nikola Tesla]）の挿話が差し挟まれており、これらの歴史上人物が両作家の作品のつなぎ目として機能していることを論じた。さらに両作家の作品の中で、これらの人物が「フロンティア」というテーマに関連して描かれていることを考察している。本論は、直接言語化できる作家との関係よりも、言語化できないアンダソンとの関連にはより肝要な意義がある可能性を探った。最終的に『ムーン・パレス』とアンダソン作品との間テクスト性の分析を通して、アンダソンを文学的父のように仰ぐオースターの姿をテクストの中に読み取っている。そして、『ムーン・パレス』を書くオースターがこの作家を重要な先行者とみなすに至った要因として、「偶然（オースターがアンダソン作品を予期せぬ形でなぞったという偶然の一致の経験）」という観点を提唱した。

第５章

４章で見た影響関係から、オースターはアンダソン作品をフロンティアのテーマから再評価していることが推察された。本章は、この観点からアンダソン作品を再考した。つまり、４章の議論を視野に入れながら、アンダソンの短編集『卵の勝利』（*The Triumph of the Egg*）におけるコロンブス批判の言説の意味を考察した。ジュディー・ジョー・スモール（Judy Jo Small）はこの短編集の作品には国家が抱える原罪が潜んでいると指摘した。本論はそれを参照しつつ考察を深め、その言説が生まれた背景（コロンブスの評価にまつわる出来事やアメリカ・インディアン協会[Society of American Indians]の活動）を提唱した。作品が発表された 20 世紀初頭にはコロンブス賛美の社会的風潮があった。これを踏まえると、この作品のコロンブス批判は特異であり、その流れを逆なでしている。このような言説が出てきた背景として、同時期の中西部を中心に活動したアメリカ・インディアン協会の言説やパフォーマンスに注目した。さらに、このようなコロンブス批判には土着の土地を愛するアンダソンの両義的心情が関わることを、『中西部の』（*Mid-AmericanChants*）の分析から論じた。最後に、フロンティアの罪深い側面を感じ取っていたアンダソンが、『ワインズバーグ・オハイオ』（*Winesburg, Ohio*）で架空の町を創造する苦悩を感じていたことを作品から読み取った。

本論は、上記のように、二組の影響の物語について偶然を鍵語として考察した。偶然という主題は作家を虜にするものであり、それが影響関係においても重要なのは自然なことかもしれない。そして彼らは、その影響の物語を作品に潜ませるにあたり、宿命を描いた古典『オイディプス王』に引き寄せられてもいた。また作品に伏流する影響の物語は先行作家の作品の再考に繋がる。トウェインやオースターの作品に潜伏する影響の物語は、ディケンズやアンダソンのテクストに新たな光をあてるものであったのだ。